

一生を通じた最大の愛読書 新渡戸稲造と聖書

鈴木範久 すずきののりひさ 立教大学名誉教授

少年新渡戸稲造が盛岡から上京してまもない一八七六（明治九）年、東北巡幸中の明治天皇は、三本木にあった新渡戸の祖父の家に立ち寄った。亡き祖父の開拓事業の説明を受け「御下賜金」が遺族に与えられ

た。その金の一部を分与された新渡戸は、記念として英訳聖書を買った。新渡戸が最初に入手した聖書である。日本語訳聖書の一冊本ができる四年前の出来事だった。まだキリスト教に入信前の東京外国語学

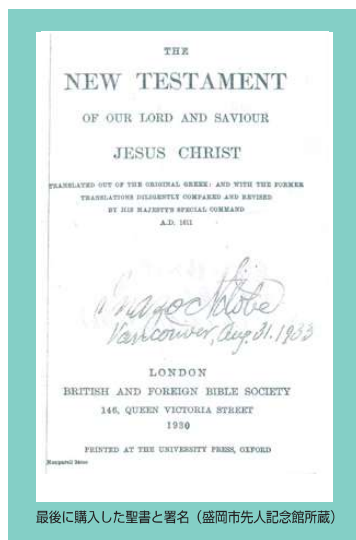
校時代であり、聖書を購入した理由は、英文学を学ぶうちに、それをいろいろの深い思想がキリスト教であることを知るようになっていたからである。

その後、札幌農学校に進んだ新渡戸ら第二期生に、クラークが用意していた英訳聖書が一冊ずつ与えられた。こうして一八七八（明治一一）年、級友の内村鑑三、宮部金吾と

ともにアメリカのメソジスト教会宣教師ハリスから受洗する。

卒業後、渡米した新渡戸は、フレンド派（友会、クエーカー）の信仰に接近、やがて同会の信徒になる。クエーカーの聖書に対する見方に関し、その信仰を唱えたフォックスの思想として、宗教というものは坊さんが教えるものでなく、またバイブルでもない。バイブルに書いてあるうとなかろうと、自分で考えて善いとみ、正しいと思つたことは実行すべきである、との言葉を新渡戸は紹介している（『人生雑感』）。

これは、決して聖書そのものを否定したものではない。現に新渡戸がもつとも愛読した書物が聖書であったからである。聖書にも人間の手の加えられた面がある。したがって、すべて神の言葉として鵜呑みにせ



最後に購入した聖書と署名（盛岡市先人記念館所蔵）

ず、疑問のあるときには心に従うこと、むしろ聖書の精神を汲み取る読み方を大切とみたのである。

アメリカに続きドイツで研究生生活を送つた新渡戸は、帰途、ふたたびアメリカに立ち寄りメリー・エルキントンと結婚する。そのとき、フィラデルフィアで一冊の新約聖書を手した。それが、今日、北海道大学の付属植物園・博物館に残されている。それには署名とともに一八九〇年九月二〇日に同地で入手したことが書き込まれている。「宮部」の印があることから、のちに宮部金吾に贈られたのであろう。この英訳の新約聖書は、一八八一年に刊行された改訳（RV）である。

帰国して母校札幌農学校の教授となった新渡戸の家に、一八九六年、遠縁の青年有



鳥武郎が同居し札幌農学校に通う。当時の有鳥の日記を見ると、日曜日にはきまって「朝、新渡戸先生ノ bible class アリ」との記述がみられる。新渡戸が、毎日曜日、自宅で聖書の講義を開いていたことがわかる。マタイ伝、ヨハネ伝、ヤコブ書などが取り上げられ、参加者には聖書が与えられていた。新渡戸自身、その後は、ほとんど聖書を教えることはなく、「聖書のことは内村に聞け」と言うようになる。しかし、聖書を愛読する生活に変わりはない。若い人たちに、聖書をはじめとする古典の読書を勧める話のなかで、英訳聖書を合わせて九冊ほど持っていることが告げられている。フィラ



「太平洋の橋」の記念碑（岩手公園）

デルフィアで入手した英訳聖書は改訳（RV）であったが、古くから親しんだ欽定訳（AV）の方が、気持ちに合ったようだ。両者の相違につき、欽定訳の「おお神よ汝は我心に下り給へ」という調子が、改訳では「ねえ神さんちよ」と来て私のお腹に入って頂戴な」となり、神様と人間との仲が慣れなれしくて敬虔の念が起きないとこぼしている

改訳では「ねえ神さんちよ」と来て私のお腹に入って頂戴な」となり、神様と人間との仲が慣れなれしくて敬虔の念が起きないとこぼしている

（読書論）。

聖書に親しむ生活が最後まで続いたことは、遺された蔵書（北海道大、東京女子大所蔵）によってもわかる。また、太平洋会議に出席するためカナダに行った一九三三（昭和八年）、ヴァンクヴァーで、さらに一冊の新約聖書を購入している。盛岡の先人記念館に保管されている同書には、八月三十一日、同地で購入したとの記入がみられる。この一ヶ月半後に世を去る新渡戸にとって最後に入った聖書となる。

新渡戸の遺骨は、妻メリーに抱かれて故国に帰って来た。同行したメリーの姪の語ったところによると、新渡戸の発病前の日記には、「なんだか地上の生活の終わりが近づいて、天国に上るような気がする」という意味の言葉がみられ、新約聖書フィリピ書一章二二節の聖句が引用されていた（石上玄一郎『太平洋の橋』）。同所の聖句を新共同訳により掲げておく。

わたしにとって、生きるとはキリストであり、死ぬことは利益なのです。